

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13909

研究課題名（和文）エスニシティ継承を可能にするための諸条件の探究

研究課題名（英文）Search for conditions to enable ethnicity succession

研究代表者

安本 博司（YASUMOTO, HIROSHI）

和歌山大学・日本学教育研究センター・准教授

研究者番号：20813025

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、在日コリアンのエスニシティ表出と継承を、エスニシティ形成と集住地域との関連から明らかにすることである。調査の結果、在日集住地域は親自身のエスニシティ形成とは直接的な関連は見いだせず、既存の家庭内での在日ネットワークの有無がエスニシティ形成・表出に関連すること、在日集住地域は、エスニシティ形成の場への接近可能性を高め、言語継承を可能にするための機関への「橋渡し」として機能すること、エスニシティ継承において言語以外のエスニシティ構成要素（本名使用の期待等）は、取捨選択されていること、学校選択は、配偶者の属性（日本人夫/妻）によって回避される傾向にあること等が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果、学術的意義は、これまで議論にあったエスニシティ形成（アイデンティティ形成）と地域性（在日集住地域）との関連において、地域性はエスニック団体への接近可能性を高めるが、エスニシティ形成自体には関連がないと示した点である。また家庭の在日ネットワークに着目し、ネットワークの有無がエスニシティ形成、エスニシティ表出に影響を与えていることを示した点である。本研究の社会的意義は、在日に限らず異なる文化的背景をもつ者が自らのエスニシティに尊厳を持ち、生きていくためのヒント、知見を提示できた点である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the ethnicity representation and inheritance of zainichi Koreans in relation to their ethnicity formation and dwelling areas of zainichi. The results of the study showed that (1) concentrated dwelling areas of zainichi have no direct relationship with ethnicity formation, and that existing zainichi networks are related to ethnicity formation and expression, (2) concentrated dwelling areas function as a “bridge” to institutions that enable ethnicity formation and language transmission, and (3) ethnicity components other than language (e.g., expectation to use one's real name) are selected for transmission, and (4) Ethnic school selection tends to be circumvented by the attributes of the spouse (Japanese husband/wife).

研究分野：教育社会学

キーワード：在日コリアン エスニシティ 地域性（在日集住地域） エスニックネットワーク エスニック団体

1. 研究開始当初の背景

総務省より多文化共生推進プラン(2006)が出され、多文化共生の重要性が指摘されてきた日本社会において、異なる文化的背景をもつ者同士が互いのエスニシティを大切に、自身のエスニシティに尊厳をもって生きていくことは、多文化共生社会を目指すうえで極めて重要なことである。しかしながら、これまでに特定の民族集団への憎悪を表すヘイトスピーチが在日コリアン集住地域で公然とおこなわれ、多文化共生を阻むような事例が数多く報告されてきた。そのような社会状況であっても、自らのエスニシティ(在日であること)を表出しているものも数多くいる。また、先行研究においてもエスニシティの顕在化(表出)と地域性との関連が示されたこともあり、在日集住地域がエスニシティの表出にどう関連しているのか、検証したいと思ったことが本研究の動機になっている。

2. 研究の目的

本研究では、エスニシティ表出を地域(在日集住地域と周辺地域)との関連から考察する。また、個々の地域での経験(ヘイトスピーチへの認識、在日のエスニック団体や多文化共生に関わるイベントへの参加の有無)を聞き取り、それらがエスニシティ継承の抑制/促進とどう関連しているのか、さらには、エスニシティ表出をなし得る諸条件、エスニシティ継承を可能にする諸条件を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するうえで、エスニシティを表出させている/させていない若い世代の在日コリアン8名(うち1名は分析対象外)を対象に半構造化インタビューをおこなった。調査期間は、2020年10月~2021年8月である。また、韓国系エスニック団体に所属するメンバーがエスニシティ継承をどのように意味づけているのかを調査するために、21名に対してアンケート調査をおこなった。インタビュー/アンケート調査の協力者は、在日コリアンのNGO団体である在日コリアン青年連合に協力を依頼し、紹介を受けた。

表1: インタビュー協力者

名前 (世代)	性別	年齢	(国)籍	家族構成 (国)籍	居住地	エスニック ネットワーク	表出 (±)
A (3世)	男	37	韓国	妻(日) 子なし	東大阪市	強	表出 (+)
B (3世)	男	38	朝鮮	妻(朝) 子3人(朝)	東大阪市 ➡大阪市生野区	強	表出 (+)
C (ダブル)	女	39	日本	夫(日) 子1人(日)	寝屋川市	強	表出 (±)
D (3世)	男	37	日本	妻(日) 子1人(日)	交野市	強	表出 (+)
E (3世)	女	39	日本	夫(日) 子2人(日)	大阪市生野区	中	表出 (±)
F (2世)	女	39	韓国	夫(韓) 子2人(韓)	大阪市生野区	中	表出 (+)
G (3世)	女	38	韓国	夫(韓➡日) 子2人(二重)	大阪市天王寺区 ➡大阪市生野区	弱	表出 (-)

4. 研究成果

本研究成果として、(1)エスニシティの表出と地域性(在日集住地域)との関連の有無、(2)エスニシティ継承の様相(言語継承と学校選択)、(3)エスニック団体成員のエスニシティ継承への希望に分けて記述する。

(1) エスニシティの表出と地域性(在日集住地域)との関連

本研究で明らかになった点は、エスニシティ表出は、単に「在日集住地域」だからといって促進されるものではないことである。集住地域は重要なファクターではあるが、エスニシティの表出には、個別の前提の有無が大きく関与する。その前提とは、既に形成されていた家庭でのネットワークの有無、親の教育観、民族的土壌にふれる程度、在日コミュニティへのコミットの程度であり、それらを土台にして形成されたエスニシティの影響が大きいと言える。さらには、それらの前提を土台に形成された新たなネットワークの有無、在日コミュニティへの関与の程度、日本社会での直接的/間接的な被差別経験などがエスニシティの表出に影響を与えていることが明らかになった。分析過程では、家庭の資源を土台に形成された強固な在日ネットワーク、自ら形成した強固な在日ネットワーク、地域性を土台に形成された緩やかな在日ネットワーク

が、インタビューデータより抽出された。 においては、地域がエスニシティ表出に関連しているよりも、むしろネットワークを通じた家庭内外での経験がエスニシティ形成につながり、表出につながっていること。 においては、子どもの通う民族学級地域を通して保護者同士のネットワークが形成され、エスニシティが表出されるが、限られた場所、関係性での表出であり、限定的であることを示した。この研究成果の意義は、エスニシティの表出を、在日の「臨界量」(人口、集住度)に起因させるのではなく、家族のもつ社会関係資本を前提として(もしくは、前提としないで)、ネットワークの継承、維持、獲得をする中で、個々人がエスニシティを形成し、体現していることを示した点である。

(2) エスニシティ継承の様相(言語継承と学校選択)

本研究で明らかになった点は、言語継承において、一定程度の共通項を見出すことができた。それは、親自身の民族学校経験の有無に拘わらず、7名すべての対象者が、子どもが韓国朝鮮語の学習・習得に期待を寄せていることであった。しかしながら、その期待として、民族学校が期待されているものの、民族学校選択は、日本人配偶者への「遠慮」から抑制されていること。また、民族学校への期待は、言葉だけでなく、歴史を学ぶことを通しての民族的アイデンティティ獲得を期待していること。韓国朝鮮語の習得は、アイデンティティ獲得の期待だけでなく、自分(子どもが自ら自分)を守る道具として、さらには、言語を通して人を助ける道具として、多様な意味づけがされていること。地域性(集住地域での同胞との接触)が、エスニックネットワークの形成に繋がり、そこから情報が伝播され、韓国朝鮮語が学べるリソースへの接近可能性を高めることが明らかになった。この研究成果の意義は、地域性(在日集住地域)が、エスニックネットワークの構築、エスニシティに関わる情報の伝播によって、保護者・子どもを含めたエスニシティの再生産に影響を与える可能性を示した点である。しかしながら、逆を言えば、集住地域ではその可能性が低いことの表れでもある。

(3) エスニック団体成員のエスニシティ継承への希望

在日のエスニック団体所属のメンバーへのアンケート調査では、自身が自らのエスニシティを表出(本名使用)させているか否かによって、子どもへのエスニシティ継承、特に本名使用への期待、国籍維持への期待の違いが示された。例えば、本名/通名使用者を軸に見ると、子どもが本名を使用することへの期待は、本名使用者の期待が高いことがわかる(表2)。また国籍維持に関しては、通名使用者では希望の有無は分かれているが、本名使用者は希望者が多い(表3)。一方、同胞との結婚希望では、本名/通名使用者とも希望の数値は低い(表4)。次にチェサ継承への希望に関しても、本名/通名使用者とも希望の数値は低くなっている(表5)。韓国習得の希望は、本名/通名使用者とも総じて多い(表6)。民族学校選択の希望では、通名使用者の大半は望んでおらず、本名使用者も希望の有無は分かれている(表7)。データこそ少ないものの、筆者がこれまでおこなってきた他のエスニック団体の調査(2015~2016)データ(表8~13)に含めて合計しても同じような傾向が示された。

表2: 本名使用への希望

		本名使用への希望				合計人
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	1	6	4	0	11
	本名	0	0	3	3	6
	その他	0	1	1	0	2
合計人		1	7	8	3	19

表8

		本名使用への希望				合計人+
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	3 [13.6%] (75.0%)	10 [50.0%] (76.9%)	7 [35.0%] (31.8%)	0 [0%] (0%)	20 (35.7%)
	本名	1 [3.1%] (25.0%)	2 [6.0] (15.3%)	14 [42.4%] (63.6%)	16 [48.4%] (94.1%)	33 (58.9%)
	その他	0 [0%] (0%)	1 [33.3%] (7.6%)	1 [33.3%] (4.5%)	1 [33.3%] (5.8%)	3 (5.3%)
合計人+		4 [7.1%]	13 [23.2%]	22 [39.2%]	17 [30.3%]	56

表3: 国籍維持への希望

		国籍維持への希望				合計人
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	1	2	3	0	6
	本名	0	1	3	2	6
	その他	0	0	1	1	2
合計人		1	3	7	3	14

表9

		国籍維持への希望				合計人+
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	3 [42.9%] (75.0%)	1 [14.3%] (11.1%)	2 [28.6%] (18.2%)	1 [14.3%] (11.1%)	7 (21.2%)
	本名	1 [4.0%] (25.0%)	8 [32.0%] (88.9%)	9 [36.0%] (81.8%)	7 [28.0%] (77.8%)	25 (75.8%)
	その他	0 [0%] (0%)	0 [0%] (0%)	0 [0%] (0%)	1 [100%] (11.1%)	1 (3.0%)
合計人+		4 [12.1%]	9 [27.3%]	11 [33.3%]	9 [27.3%]	33

表4: 同胞との結婚希望

		同胞との結婚希望				合計人
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	6	4	2	0	12
	本名	3	3	1	0	7
	その他	0	0	1	1	2
合計人		9	7	4	1	21

表10

		同胞との結婚希望				合計人+
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	12 [54.5%] (57.1%)	7 [31.8%] (30.4%)	3 [13.6%] (23.0%)	0 [0%] (0%)	22 (37.2%)
	本名	3 [29.5%] (38.0%)	16 [47.0%] (69.5%)	9 [26.4%] (69.2%)	1 [2.9%] (50%)	34 (57.6%)
	その他	1 [33.3%] (4.7%)	0 [0%] (0%)	1 [33.3%] (7.6%)	1 [33.3%] (50%)	3 (5.0%)
合計人+		21 [35.5%]	23 [38.9%]	13 [22.0%]	2 [3.3%]	59

表5：チェサの継承への希望

		チェサの継承への希望				合計人
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	2	5	4	1	12
	本名	0	4	1	2	7
	その他	0	0	2	0	2
合計人		2	9	7	3	21

表6：韓国語習得への希望

		韓国語習得への希望			合計人
		あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	4	6	2	12
	本名	1	3	2	6
	その他	1	0	1	2
合計人		6	9	5	20

表7：民族学校への希望

		民族学校への希望				合計人
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	2	7	3	0	12
	本名	1	3	2	1	7
	その他	1	1	0	0	2
合計人		4	11	5	1	21

表11

		チェサの継承への希望				合計人+
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	7 [31.8%]	5 [58.3%]	8 [36.3%]	5 [22.7%]	22 [36.6%]
	本名	4 [11.4%]	3 [33.3%]	18 [51.4%]	10 [28.5%]	35 [58.3%]
	その他	1 [33.3%]	0 [8.3%]	0 [0%]	2 [66.6%]	3 [5.0%]
合計人+		12 [25.6%]	9 [43.6%]	26 [43.6%]	17 [25.6%]	60

表12

		韓国語習得への希望			合計人+
		あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	5 [28.5%]	10 [47.6%]	5 [23.8%]	21 [36.2%]
	本名	3 [8.8%]	13 [38.2%]	18 [52.9%]	34 [58.6%]
	その他	1 [33.3%]	0 [0%]	2 [66.6%]	3 [5.1%]
合計人+		10 [17.2%]	23 [39.6%]	25 [43.1%]	58

表13

		民族学校への希望				合計人+
		全然思わない	あまり思わない	思う	とても思う	
名前	通名	6 [27.2%]	12 [54.5%]	4 [17.3%]	0 [0%]	22 [25.6%]
	本名	4 [11.4%]	13 [37.1%]	11 [32.3%]	7 [20.5%]	35 [58.3%]
	その他	1 [33.3%]	1 [33.3%]	0 [0%]	1 [33.3%]	3 [5.0%]
合計人+		11 [18.3%]	26 [43.3%]	15 [25.0%]	8 [13.3%]	60

以上のことから、在日のエスニック団体において、本名使用を通して、エスニシティを表出している者は、子どもへの「本名使用」「国籍維持」への期待が高いことがわかるが、一方、通名使用者の場合は極端に低くなっていることがわかる。

本研究成果の意義は、本名使用という形でエスニシティ表出している者とそうでない者との間での継承の意識が異なっている点を示した点である。またエスニシティの構成要素の「何を」継承しようとしているかを、取捨選択しようとしている姿勢が明らかになった。

<参考文献>

Fischer, Claude S. (1975), Toward a Subcultural Theory of Urbanism. *American Journal of Sociology*, 80(6):1319-41(フィッシャー, C. S. 広田 康生(訳)(2012)「アーバニズムの下位文化理論に向かって」, 森岡 清志(編)『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社, 129-164).

福岡安則(1993)『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』, 中央公論社.

福岡安則・金 明秀(1997)『在日韓国人青年の生活と意識』, 東京大学出版会.

国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウ(2014)『在日コリアンに対するヘイト・スピーチ被害実態調査報告書』, https://hrn.or.jp/activity_statement/2105/(2022年2月8日閲覧).

西田芳正(2002)「エスニシティのメカニズム」, 谷富夫(編)『民族関係における結合と分離 社会的メカニズムを解明する』, ミネルヴァ書房, 512-540.

真田信治・生越直樹・任榮哲編(2005)『在日コリアンの言語相』, 和泉書院.

志水宏吉・清水睦美(2001)『ニューカマーと教育』, 明石書店.

志水宏吉・山本 ベバリーアン・鍛治 致・ハヤシザキ カズヒコ(編)(2013)『「往還する」人々の教育戦略：グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』, 明石書店.

総務省(2006)『地域における多文化共生推進プラン』, https://www.soumu.go.jp/main_content/000770082.pdf(2022年2月11日閲覧).

徳田剛・二階堂 裕子・魁生由美子(2016)『外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題 結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から』, 創風社出版.

安本博司(2019)『コリア系移住者の民族継承 教育戦略と文化伝達』, ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 安本博司
2. 発表標題 在日コリアンのエスニシティ形成と表出：集住地域の可能性と限界
3. 学会等名 韓国日本学会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安本博司
2. 発表標題 在日コリアンのエスニシティ継承－アイデンティティに着目して
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安本博司
2. 発表標題 在日コリアンのエスニシティ表出 - 地域性との関連に着目して -
3. 学会等名 移民政策学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安本博司
2. 発表標題 在日コリアンのエスニシティ教育・文化・地域に着目して
3. 学会等名 韓国 東国大学日本学研究所（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

以下(1)(2)は、研究の遂行、データ分析のために必要なものとして開催した。(1)令和4年度3月に、自身が所属する「エスニシティ研究会」と「つるはしにほんごきょうしつ」及び「関西実践日本語教育研究会」との共催で「『アイたちの学校』を通して考える多文化共生」というテーマで研究発表大会、映画上演会を開いた。前者においては、「エスニシティ表出を可能にするための条件」として、これまでの研究の分析結果の一部を発表し、後者においては、研究テーマと関連のある朝鮮学校を題材にしたドキュメンタリー映画「アイたちの学校」を上演した。その際、監督である高賛侑氏を招き、講演、質疑応答を通じて、在日コリアンとの共生の重要性を共有し、多文化共生についての学びを深める機会を設けた。(2)令和3年8月に、自身が所属する「エスニシティ研究会」と研究協力団体である「NGO団体に在日コリアン青年連合」との共催で「在日コリアン支援経験から多文化共生を考える」というテーマのもと、研修会を開いた。その研修会では、在日コリアン集住地域についての理解を深めるために、大阪コリアタウン周辺のフィールドワークを実施した。また研修会では、長年、在日コリアンの権利擁護に尽力し、現在も大阪市生野区内で、多文化共生事業に関わる在日コリアンの地域従事者を招き、在日コリアン集住地域における多文化共生に関わる取組み、課題などについて講演いただき、学ぶ機会を設けた。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------